

## フィールドワークを評価する

### —「フィールドワークー共生の森もがみ」の3年間の総括—

杉原 真晃

(基盤教育院・高等教育研究企画センター)

#### はじめに

大学における現地体験型の教育は、これまで、インターンシップ、教育実習等に代表されるような専門教育におけるものが中心であった。そこでは、学生の実践的な知識・技能の育成や職業意識の向上という大学あるいは学生にとってのメリットがあるとともに、優秀な人材の育成という経済社会にとってのメリットがあった。

一方で、教養教育における現地体験型の教育は、専門教育におけるそれとは異なる意義があると考えられる。杉原(2008)は、山形大学が教養教育科目として開講している「フィールドワークー共生の森もがみ」の取組が、大学にとって、学生にとって、そして地域社会にとってどのような意義があるのかについて、聞き取り調査をもとに考察した。本授業は、山形大学が進める大学と地域の連携プロジェクトである「山形大学エリアキャンパスもがみ」の中心的事業である。

「フィールドワークー共生の森」では、地域と大学による相互貢献の関係が成立し、経済的なメリットだけではなく、知的・文化的、さらには人材育成的、人的ネットワーク的なメリットが存在していることがわかった。それは、地域社会と大学が相互貢献の関係において連携することで、地域が経済的・文化的価値を共有・創造する場、金融資本・人的資本・社会資本を育む場として成立する「学習地域(Learning Region)」(OECD, 2005)となっていることを意味する。

しかし、これらは「フィールドワークー共生の森もがみ」が開始されて1年後の聞き取り調査の結果である。地域と大学との連携を実質的かつ持続的な

ものにするためには、より継続的かつ広範囲の調査が必要となる。

このような背景により、このたび、「フィールドワークー共生の森もがみ」が3年間実施された後に、かかわった多くの学生および地域の人々の声を集めるべく、アンケート調査を実施した。本稿は、そこで集められたデータをもとに、教養教育科目としてのフィールドワークが、学生にとって、そして地域社会にとって、どのような意味を持ったのかについて、考察するものである。

#### 1. 「山形大学エリアキャンパスもがみ」の誕生

大学が地域社会と連携して、研究や教育を進めていくという活動は、今や十分に市民権を得ている。

山形大学においても、平成16年度に山形県最上広域圏の全8市町村と包括的協力協定を締結し、大学と地域が連携を行う「山形大学エリアキャンパスもがみ」(以降、エリアキャンパスもがみ)を設立した。エリアキャンパスもがみは、校舎を建てるのではなく大学の「機能」を新たに地域に持たせ、最上広域圏全体をキャンパスと見立てるソフト型キャンパスである。さらに、全国の大学等によく見られる「テーマ」ごとの協力関係の締結ではなく、地域を丸ごとキャンパスとし、自由で多様なテーマに対応できるようにしたエリア型の連携である。

エリアキャンパスでは、教育、研究、課外活動等、多様な大学の活動が展開されている。これらを「エリアキャンパス未来遺産創造プロジェクト」と総称し、地域と大学とのダイナミックな双方向的連携により、地域の活性化、人材育成、そして大学生の能力育成が進められている。

本取組は、SD (Staff Development) の一貫で山形県最上広域圏に本学事務職員が出向いたことが契機となり誕生した。「最上」「庄内」「村山」「置賜」という4つの広域圏からなる山形県において、最上広域圏は唯一、高等教育機関が存在せず、若者の人口が極端に少ない少子高齢化の進む地域である。このような地域において、大学が、そして大学生が地域と関係を持つことは、最上広域圏から強く切望されていた。

## 2. 「フィールドワーク-共生の森もがみ」の概要

### 2-1. 経緯

本取組の事業の中心をなすのが、教養教育科目であり山形大学が初年次教育として位置付けている授業科目「フィールドワーク-共生の森もがみ」である。この科目は、最上広域圏における文化や人材育成活動そのものを「未来遺産」と名付け、そこに学生が土日を利用して参加するという教育プログラムである。多様かつ複雑な課題を持つ地域社会、そしてそこで展開されるさまざまな取組に学生がかかわることで、自由でかつ柔軟な学習成果を期待した、教養教育プログラムとして、本授業は誕生したのである。

### 2-2. 内容

本授業の目標は、「フィールドワークを通して、地域、文化、歴史、過疎化、少子高齢化等の現代日本が直面する諸問題を地域の人たちと一緒に考えること」、「最上、山形、日本、そして世界を知ること」、「課題発見能力、課題探求能力、コミュニケーション能力、プレゼンテーション能力、行動力、社会性等の基礎的な力を身につける」ことである(2009年度山形大学教養教育シラバスより)。

本授業は平成18年度より開講され、年間約20プログラム(1プログラムあたり約10名)、200名を超える受講生が最上広域圏を訪れている。

授業は、①ガイダンス、②学内オリエンテーション、③1泊2日(×2回)の現地体験学習、④事後レポート提出、⑤活動報告会から構成される(図1参照)。

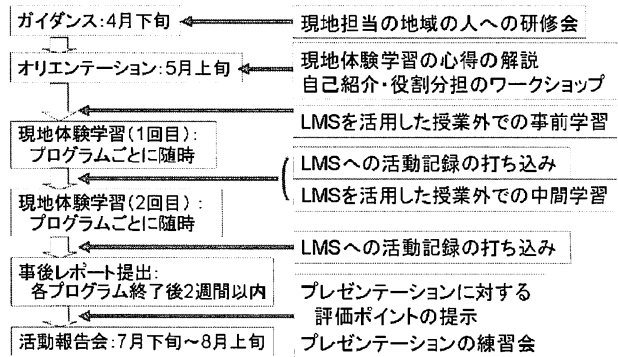


図1 「フィールドワーク-共生の森もがみ」の授業デザイン(春学期スケジュール)

ガイダンスでは、地域の担当者が大学に来て自らの教育プログラムを学生に紹介し、学生は自分が参加したいプログラムを選択する。また、その地域の人々を対象に学生の問題発見能力、積極性、コミュニケーション能力を高めるための研修会も実施している。

学内オリエンテーションでは、フィールドワークの概要や必要な手続き、大学生としての現地体験型学習の心得を説明し、続いて受講生同士の学習意識と役割意識の向上を目的としたワークショップを行っている。

現地体験学習では、学生が地域の諸活動へ参加し現地の人との交流を深める。週末の土日を活用して1泊2日のプログラムに2回参加する。民泊を取り入れているプログラムもあり、学生は活動の合間の日常的な会話も含め地域の生の声に触れる。そして、毎回、現地で行ったこと、感じ・考えたことを活動記録として記述する。さらに、ICTを活用したLMS(学習支援システム)により体験学習前後の時間外学習も設定している。

事後レポート提出では、全日程終了後に、1,000字程度の事後レポートを書き、学生は体験を通して知り・感じたことを省察・論理化する。

活動報告会では、プログラム毎に活動内容やそこの学び等についてプレゼンテーションを行う。これにより学生は自分たちの学びを振り返るとともに、他のグループの体験・学びを共有できる。さらに、活動報告会に際し、事前にプレゼンテーションのポイントを提示し数度にわたる発表練習会を開催して

いる。これらの支援により、地域での学習経験の深化や大学に戻っての学習の質の向上を図っている。

### 3. 「フィールドワーカー共生の森もがみ」の評価

#### 3-1. 学生からの評価

われわれは、「フィールドワーカー共生の森もがみ」を受講した過去3年間の受講生全員を対象に、アンケート調査を実施し、121名からの回答があった。実施時期は、2009年2月であり、郵送による配布と回収を行った。質問項目は、本稿末をご参照いただきたい。

以下では、本アンケートに見られた学生の回答について紹介する。

#### ◆総合的評価

「この授業をふり返って、今、どう思いますか?」という質問を行った。「大変よかった」、「まあまあよかった」、「ふつう」、「あまりよくなかった」、「まったくよくなかった」という選択肢から選択してもらった。結果は、次のようになった。

表1 「フィールドワーカー共生の森もがみ」  
学生からの3年間の総合評価

(回答者数 121)		
項目	回答数	割合(%)
大変よかった	62	51.2%
まあまあよかった	49	40.5%
ふつう	6	5.0%
あまりよくなかった	4	3.3%
まったくよくなかった	0	0.0%

「大変よかった」が62名(51.2%)、「まあまあよかった」が49名(40.5%)、「ふつう」が6名(5.0%)、「あまりよくなかった」が4名(3.3%)、「まったくよくなかった」が0名(0.0%)となった。平均値は4.4であった。「大変よかった」と「まあまあよかった」を合わせて9割以上の学生から本授業が高く評価されていることがわかる。

評価の次に、その理由について自由記述してもら

った。そこには、「ただ学ぶだけでなく、実際に様々な地に行き能動的に学べた。」、「金山町の現状と、少子高齢社会の問題について知ることができ、自分たちができることは何かと教える時間が与えられていい経験になり、とても勉強になった。」、「受講したことで商店街の方々の活性化への思いを感じ、自身も故郷に付いて考えることができるようになった。」等の意見が見られた。地域社会が持つ課題を肌で触れること、地域の人々の熱意に直に触れること等が学生の心を動かし、学びを深めたといえよう。

もちろん、アンケート調査に回答する学生は、本授業に対してよい印象を持っている学生である可能性は高いであろう。しかしながら、本授業では、全学で実施している学生による授業評価アンケートである「授業改善アンケート」においても、開始された18年度の前期「4.81」(後期は未実施)、19年度後期「4.83」(前期は未実施)、20年度前期「4.72」、同年度後期「4.69」(いずれも5点満点)という具合に、常に学生から高い評価を得ている。このことから、本授業は、受講後も継続的に良い印象が残る、優れた授業だということができよう。

#### ◆授業での学びが現在の自分に活きていること

「この授業が今の自分に活かされていることについてお聞かせください。該当する箇所には○をつけてください(複数ある場合は、そのすべてに○をつけてください)」という質問を行った。結果は次のようになった。

表2 「フィールドワーカー共生の森もがみ」  
での学びが現在の自分に活きていること

(回答者数 121)		
項目	回答数	割合(%)
地域や社会全般について考えるようになった	75	62.0
自然や環境について考えるようになった	71	58.7
授業で知り合った友人との交友が続いている	63	52.1
山形が好きになった	47	38.8
さまざまな人とコミュニケーションをとることができるようになった	46	38.0
さまざまな人とかかわりを持つとする社会性が身についた	44	36.4

自分の郷土について考える機会が増えた	37	30.6
「考える」習慣が身についた	26	21.5
活動的になった	25	20.7
山形大学が好きになった	21	17.4
大学の授業全般に対する学習意欲が向上した	19	15.7
主体的に学習するようになった	14	11.6
その後、何度か授業で知り合った地域の人々との交流を持っている	13	10.7
人に優しくするようになった	11	9.1
書く力や情報収集力等の学習スキルが身についた	6	5.0
本授業で学んだ知識・技能を大学生生活や日常生活で活かすようになった	6	5.0
将来、山形県最上地域に住みたいと思うようになった	4	3.3
回答者数	121	

回答数の多いものに、「地域や社会全般について考えるようになった」(75名、62.0%)、「自然や環境について考えるようになった」(71名、58.7%)、「さまざまな人とコミュニケーションをとることができるようになった」(46名、38.0%)、「『考える』習慣が身についた」(26名、21.5%)、「大学の授業全般に対する学習意欲が向上した」(19名、15.7%)等が見られた。

学生が地域や社会全般について、自然や環境について考えるようになったことは非常に重要なことである。なぜならば、大学という時期は、大人になり、社会人になり、社会参画する存在となるための変容期間であるからである。学生が「自分が良い成績を取るため」ではなく、「自分が社会・世界にかかわり」、「自分の知識・技能によって、社会・世界を良くしていく」ために学習を進めていくという転換が、ここにおいて見られているといえよう。

さらに、コミュニケーション、考える習慣、学習意欲、主体的な学習等が向上していることも重要なことである。1つの授業での学びという枠を超えて、他の授業、日常生活等に対して、本授業が良い影響を及ぼしているということは、学生の大学生活全体の質が向上していることにつながるからである。

#### ◆印象に残っていること

「この授業について、今、印象に残っていることをお書きください。」という質問を行った。数多く寄せられた回答のうち、代表的なものを取り上げる。

#### 学生 A (3年生)

- ・失敗を重ねても改良や研究で成功に至り、家や資料館、集会場に取り入れるようになった点。
- ・昨年の洞爺湖サミットで、世界中から来た報道関係者が利用する大型施設で、雪を使った冷房システムを設けたと聞いた時、この授業を思い出せた。

#### 学生 B (3年生)

- ・初めての田植えを経験させて頂き、お米のありがたみを実感することができた。
- ・蛍を目近で見ることができた。
- ・村の子供たちと触れ合うことができた。

#### 学生 C (3年生)

- ・子どもの成長。
- ・友人、所長さん方との交流。
- ・自分についてあらためて考えることができた。
- ・自然。

#### 学生 D (3年生)

- ・伝統祭り。
- ・地域の人の祭りにかける熱意。
- ・他学科との交流。
- ・伝統を守り続けることの大切さ。
- ・親子代々継承することの大切さ。

#### 学生 E (2年生)

- ・かんじきをはいて山に登ったこと(冬)。
- ・ホームステイでの体験。
- ・アスパラガス、さくらんぼの収穫を手伝ったこと。

#### 学生 F (2年生)

- ・山形について、楽しみながら学習することができました。
- ・夜とても暗くて、星がたくさん見えました。初め

での経験でした。

- ・こけしに絵つけをしたり、コースターをつくったりと楽しかったです。

#### 学生 G (1年生)

- ・大学にやってきた中で最も親しい友人ができた。
- ・山形の田舎の厳しい現実を目のあたりにして、深く考えた。
- ・過疎化に直面しながらも、地域を愛する地元民の熱意が伝わった。

#### 学生 H (1年生)

- ・町役場の人に、「自分の町が好きだ」ということを語って頂いた場面。
- ・夕食でごちそうになったもつ煮込みが、裸電球の光に照らされている場面。

これらの感想に見られるように、学生は、地域の自然・人・文化の素晴らしさに心動かしている様子がわかる。それは、普段経験しないような素朴な生活に触れ、日本の生活の多様さ、山村部の生活の大切さ・素晴らしさ・大変さを感じ取り、学生たちの世界観を変容させていくのである。学生A、学生Cの学生の感想に見られるような、その後の学習や生活との関連づけは、その代表的な様子といえよう。

そして、学生たちは「心が動く」ことにより、地域の抱える課題を他人事ではないものとして受け止める。教科書に書かれた、「どこかの、誰か」の問題ではなく、自分の知っている、大好きな人、そして自分の問題として、地域の在り方を考え、自分の在り方を問うようになるのである。

### 3-2. 地域の人々からの評価

われわれは、「フィールドワーカー共生の森もがみ」を開始して以降、本授業にかかわってくださった地域の方々全員を対象にアンケート調査を実施し、59名からの回答があった。実施時期は、学生への3年間の総括アンケートと同様、2009年2月であり、郵送による配布と回収を行った。質問項目は、本稿末をご参照いただきたい。

以下では、本アンケートに見られた地域住民の方々の回答について紹介する。

#### ◆総合評価

「本授業を総合的に評価するとすれば、どのようになりますでしょうか。該当する箇所に○印をつけてください。」という質問を行った。結果は次のようになった。

表3 「フィールドワーカー共生の森もがみ」  
地域住民からの3年間の総合評価

(回答者数 59)

項目	回答数	割合(%)
大変よい	25	44.6%
まあまあよい	23	41.1%
ふつう	8	14.3%
あまりよくない	0	0.0%
まったくよくない	0	0.0%
「まあまあよい」と「ふつう」の間	1	1.8%
無記入	2	3.6%

「大変よい」は25名(42.4%)、「まあまあよい」が23名(39.0%)、『まあまあよい』と『ふつう』の間が1名(1.7%)、「ふつう」が8名(13.6%)、「無記入」が2名(3.4%)、「あまりよくない」と「まったくよくない」は0名(0%)となった。平均値は4.3であった。「大変よい」と「まあまあよい」を合わせて8割以上の地域住民が、本授業を高く評価していることがわかる。

#### ◆良かった点

「本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、『良かった点』をお聞かせください。該当する箇所に○印をつけてください。(該当するものが複数ある場合は、すべてに○印をつけてください)」という質問を行った。結果は次の通りである。

表4 「フィールドワーカー共生の森もがみ」  
 学生が地域の活動に参加することの「良かった点」  
 (回答者数 59名)

項目	回答数	割合(%)
自分自身にとって、よい経験になった。	32	54.2
地域の高齢者の方々にとって、よい交流となった。	32	54.2
楽しかった。	29	49.2
地域の子どもたちにとって、よい経験になった。	25	42.4
地域が活気づき、明るくなった。	24	40.7
地域の子どもたちが、大学生がまた来るのを楽しみにしている。	20	33.9
地域の魅力を新たに、改めて知った。	20	33.9
元気が出た。	19	32.2
地域の課題に新たに、改めて気づいた。	17	28.8
地域住民同士の交流が活発になった。	15	25.4
その後も継続的に学生が来てくれるようになった。	15	25.4
生きがいあらためて感じた。	14	23.7
学生に将来地域に根づいた活動をしてもらえる可能性が高まった。	14	23.7
地域活性化に関するアイデアが豊かになった。	13	22.0
大学生が来て、経済的効果があった。	13	22.0
地域の青年にとって、よい交流になった。	9	15.3
さまざまな資金援助(競争的資金、補助金など)を獲得することに役立った。	4	6.8
特に良かった点はない。	1	1.7

回答者数の多かったものに、「自分自身にとって、よい経験になった。」(32名、54.2%)、「地域の高齢者の方々にとって、よい交流となった。」(32名、54.2%)、「楽しかった」(29名、49.2%)、「地域の子どもたちにとって、よい経験になった。」(25名、42.4%)、「地域が活気づき、明るくなった。」(24名、40.7%)、「地域の子どもたちが、大学生がまた来るのを楽しみにしている」(20名、33.9%)、「地域の魅力を新たに、改めて知った。」(20名、33.9%)等

があった。

自分にとって良い経験となるという実感、楽しさによる地域での活動・生活の意欲向上とともに、地域の高齢者が元気になること、地域が活気づくこと・明るくなることは、さまざまな問題を抱える地域社会が持続的に発展していくために重要な要素となるといえよう。さらに、地域の子どもたちが大学生と触れ合うことで、元気になる、夢と憧れを抱き、大きく成長していく契機となることは、今後の地域社会を担う人物の育成という、地域社会にとっての大きな希望となる。本授業は、このような意義を持つものとして、地域住民の人々から認識されているということになるのである。

#### ◆良かった点(自由記述)

「本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、質問「2」(筆者注：先述した「よかった点」の選択質問)でお答えいただいたもの以外に感じられた『良かった点』をお聞かせください。(自由記述)」という質問を行った。

そこでは次のような回答が見られた。

- ・この地域は人口交流が少ない所なので、人口交流が活発に出来た事、これに伴い経済効果があった点が、何よりも住民のやる気を引き出したと思います。
- ・学生の元気なパワーをいただいた事です。地産地消を考えた田舎料理でもおいしいと食べていただいたのが印象的でした。
- ・地域のおばあちゃん達が学生の取材を受け大変感激し、その後の生き甲斐につながっている。
- ・地域の子供達や高齢者にとっても、よい交流になりとても地域が明るくなり、角川住民同士もとても活発になり、地域も大学生が来られて、本当に明るい角川地域になり、又経済効果にもなり、角川地域の皆さんは大歓迎です。
- ・ホームステイでは家庭が泊まるのは、以前と違ってなくなっています。今回の試みで家族の皆さんは喜びました。娘のような、姉のような孫のような感覚で接しています。大学生を身近に見る、話

すことより子供達は想像以上に効果がありました。

これらの感想に見られるように、学生が地域に入り込むことが、地域の人々の「心」が動かすことを生み出していることがわかる。感動、元気、明るさ、生き甲斐等、地域の活力の源につながっているようである。

そして、次のような感想も見られた。

- ・地域の人々は、行動、考え等がどうしても単調的になりがちですが、大学生の多様、多様な考え、ものの見方により地域の人々も多様な考えを持ったように感じます。
- ・街の活性化を探る上では学生の視点がとても重要である。学生たちの様々な意見が、行政運営にも生かされると本物になる。
- ・県外出身の学生との交流で、改めて自分の地域の特性を知ることが出来た。
- ・自分の体験してきたことや人生感を若い学生に話すことで、あらためて自分のことを再確認することができる気がする。

これらの感想に見られるように、学生の地域活動への参加は、地域の特徴を改めて考える契機、地域にとって多様で新たな視点、自分たちの振り返り等を生み出していることがわかる。学生という他者の目が入ることで、当たり前のようにすぎるいつもの光景・いつもの生活が、地域が元気になる源そのものとしての意義を持つことに気づくのであろう。

さらに、次のような感想も見られた。

- ・山大生が戸沢村に来る事によって子供達、地域の方々も活動に参加してくれまして、大変良いことだと思っております。

このように、学生が地域に入り込むことにより、地域住民自体の交流が盛んになる、ネットワークが豊かになるという効果があるのである。この授業が地域の社会資本の向上に影響しているといえよう。

## おわりに

本稿では、大学教養教育科目としての現地体験型教育の代表であるフィールドワークが、学生にとって、そして地域社会にとって、どのような意味があるのかについて、実証的に考察を行った。

事例として扱った「フィールドワーカー共生の森もがみ」では、学生は体験学習というインパクトにより、地域の諸課題やすばらしさという対象世界との対話、自分自身の故郷や大学生の自分の在り方という自己との対話、そして他学生や地域住民という他者との対話を行いながら、それぞれとの関係性を作りだし、作り直している様子が伺われた。佐藤（1995）は、学びが、対象世界・自己・他者との関係性の編み直しであると述べる。本授業「フィールドワーカー共生の森もがみ」は、まさしくこのような学びをもたらしていたのである。

さらに、本授業は学生にとってのメリットだけでなく、地域・地域住民にとっても大きなメリットをもたらしていた。学生が地域の活動に参加することで、地域住民の元気、生き甲斐、交流を生み出し、地域の魅力を新たに発見することのきっかけとなっているのである。

このような学生と地域との相互貢献の関係は、授業「フィールドワーカー共生の森もがみ」、およびその基盤である「エリアキャンパスもがみ」を持続的に発展させるための重要な要素となるといえよう。

地域活性化には、「よそ者・若者・ばか者」が必要とよく言われる。「ばか者」とは、地域活性化のために非常に熱心に活動するリーダーのことを指し、いい意味で使われる言葉である。「よそ者」である「若者」が地元の「ばか者」と接触することで、地域社会には大きなエネルギーが生まれる。先述したように、最上広域圏には高等教育機関が存在しない。それは、つまり、18歳以上の若者の姿が地域社会から抜け落ちていることを意味する。そこに、大学生が入ることで、発生するエネルギーは、経済資本の充実だけでなく、人的資本、そして社会資本の充実を生み出す。つまり、地域住民同士のかかわりの増加、楽しさと希望の向上、生きがいの発見、地域活性化

のためのアイデアと具体的活動の源が、創造されるのである。経営の神様と呼ばれる松下幸之助氏は、「希望を失わないでやっていると自然と知恵も出てくる。」(松下, 1968) と言う。本授業のもっとも大きな貢献は、学生、そして、地域住民の希望を創りだしていることなのかもしれない。そして、それは上記の感想にも表れているように、地域の子どもたちの夢となり、刺激となり、「希望」は世代継承されていくのである。

#### 引用・参考文献

杉原真晃・小田隆治・出川真也 (2008) 「山形大学の挑戦—『山形大学エリアキャンパスもがみ』に見られる地域連携のあり方—」第 57 回 東北・北海道地区大学一般教育研究会研究集録, 62-65 頁.

松下幸之助『道をひらく』PHP 研究所, 1968 年.

OECD 編 (相原総一郎、出相泰裕、山田礼子訳)『地域社会に貢献する大学』玉川大学出版部, 2005 年.

佐藤学「学びの対話的实践へ」佐伯胖・藤田英典・佐藤学編『学びへの誘い：シリーズ 学びと文化 1』東京大学出版会, 1995 年, 49-91 頁.

山形大学エリアキャンパスもがみ HP :

<http://www.yamagata-u.ac.jp/gakumu/yam/index.html>



資料1：フィールドワーカー共生の森もがみ」3年間の総括アンケート（学生用）  
（質問項目のみ記載。表紙、属性を問う質問等は不記載。）

1. 「フィールドワーカー共生の森もがみ」（以下、「この授業」と表記）を受講した時期はいつですか？  
該当する箇所に○印をつけてください（複数回受講された方はそのすべてに○をつけてください）。
- そして、その時のプログラム名をお知らせください（プログラム名がわからない場合は「プログラム名」欄は空白で結構です）。

- a. 平成18年度春学期【参加プログラム名： 】
- b. 平成18年度秋学期【参加プログラム名： 】
- c. 平成19年度春学期【参加プログラム名： 】
- d. 平成19年度秋学期【参加プログラム名： 】
- e. 平成20年度春学期【参加プログラム名： 】
- f. 平成20年度秋学期【参加プログラム名： 】

2. この授業をふり返って、今、どう思いますか？ 該当する箇所に○印をつけ、その理由をお書きください。

大変 よかった	まあまあ よかった	ふつう	あまり よくなかった	まったく よくなかった
------------	--------------	-----	---------------	----------------

理由を具体的に

3. この授業について、今、印象に残っていることをお書きください（箇条書きで結構です）。

4. この授業が今の自分に生かされていることについてお聞かせください。該当する箇所に○をつけてください（複数ある場合は、そのすべてに○をつけてください）。該当するものがない場合は、「その他」の欄に具体的にお書きください。
- a. 主体的に学習するようになった。
  - b. さまざまな人とコミュニケーションをとることができるようになった。
  - c. 地域や社会全般について考えるようになった。
  - d. さまざまな人とかかわりを持とうとする社会性が身についた。
  - e. 活動的になった。
  - f. 「考える」習慣が身についた。
  - g. 自然や環境について考えるようになった。
  - h. 人に優しくするようになった。
  - i. 大学の授業全般に対する学習意欲が向上した。
  - j. 書く力や情報収集力等の学習スキルが身に付いた。
  - k. 授業で知り合った友人との交友が続いている。
  - l. 本授業で学んだ知識・技能を大学生生活や日常生活で活かすようになった。  
(具体的に \_\_\_\_\_ )
  - m. その後、何度か授業で知り合った地域の人々との交流を持っている。
  - n. 自分の郷土について考える機会が増えた。(あなたの故郷: \_\_\_\_\_)
  - o. 山形が好きになった。
  - p. 山形大学が好きになった。
  - q. 将来、山形県最上地域に住みたいと思うようになった。
  - r. その他 ( \_\_\_\_\_ )
  - s. その他 ( \_\_\_\_\_ )
5. 自由記述欄：その他、感想などありましたら、お書きください。

資料2：フィールドワーカー共生の森もがみ」3年間の総括アンケート（地域の人々）  
（質問項目のみ記載。表紙、属性を問う質問等は不記載。）

2. 本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、「良かった点」をお聞かせください。該当する箇所に○印をつけてください。  
（該当するものが複数ある場合は、すべてに○印をつけてください）

- a. 楽しかった。
- b. 自分自身にとって、よい経験になった。
- c. 生きがいをあらためて感じた。
- d. 元気が出た。
- e. 地域の子どもたちにとって、よい経験になった。
- f. 地域の子どもたちが、大学生がまた来るのを楽しみにしている。
- g. 地域の高齢者の方々にとって、よい交流となった。
- h. 地域の青年にとって、よい交流になった。
- i. 地域が活気づき、明るくなった。
- j. 地域住民同士の交流が活発になった。
- k. 地域の魅力を新たに、改めて知った。
- l. 地域の課題に新たに、改めて気づいた。
- m. 地域活性化に関するアイデアが豊かになった。
- n. 大学生が来て、経済的効果があった。
- o. その後も継続的に学生が来てくれるようになった。
- p. 学生に将来地域に根づいた活動をしてもらえる可能性が高まった。
- q. さまざまな資金援助（競争的資金、補助金など）を獲得することに役立った。
- r. 特に良かった点はない。

3. 本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、質問「2」でお答えいただいたもの以外に感じられた「良かった点」をお聞かせください。  
（自由記述）

4. 本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、「改善すべき点」がございましたらお聞かせください。(自由記述)

5. 本授業で大学生が地域の活動に参加することについて、今後、良いアイデア等がございましたらお聞かせください。(自由記述)

6. 本授業を総合的に評価するとすれば、どのようになりますでしょうか。  
該当する箇所に○印をつけてください。

大変よい	まあまあ よい	ふつう	あまり よくない	まったく よくない

7. その他、ご意見・ご感想などがございましたら、ご自由にお書きください。